

三川内焼の歴史と魅力

長崎県文化振興課学芸員

松下 久子

長き伝統を誇る三川内焼

三川内^{みかわち}は、およそ400年の歴史をもつ窯場であり、日本では有田^{ありた}、波佐見^{はさみ}につぐ古い磁器産地である。その名称は、生産地である三川内(現長崎県佐世保市三川内町)の地名にちなんだものであるが、江戸時代に焼かれた物は、平戸藩領内の焼き物という意味で、平戸焼とも呼ばれる。

三川内山が一角を占める肥前窯業地帯は、日本最古の磁器生産地である。そのなかで三川内焼は、独特の繊細で格調高い作風をつくりあげ、国内外の人々を魅了してきた。そしていまなお、その伝統を受けつぎ、丹精こめた焼物づくりがおこなわれている。

本稿ではおもに、三川内焼がはじまった17世紀から黄金時代を迎える19世紀までの三川内焼の歴史と魅力を紹介したい。

第1章 三川内焼の歴史

1. 三川内焼のはじまり

白磁鉢の発見

日本で最初に磁器がつくられたのは、三川内から直線距離で6kmほど離れた場所にある有田町西部で、1610年代のことである。三川内焼は、それより少し遅れ1630年代から本格的な磁器の焼成がはじまった。『三川内窯業沿革史』によると、

1633年(寛永10)に朝鮮人陶工巨関^{こせき}の子である三之丞が三ツ岳で白磁鉾(原料の石材)を発見し、まもなく白磁や青磁の焼成に成功したとされる。1637年(寛永14)には、平戸藩主の命により三川内に陶磁器製造所が創設され、1641年(寛永18)、三之丞が皿山棟梁兼代官に任命され、今村の姓を賜った。1643年(寛永20)には、三川内に近い木原山と江永山に陶磁器製造所が分設されたという。

このように、1630~40年代には、三川内・木原・江永の三皿山によるやきものの生産体制が整い、三川内を中心に平戸藩の窯業が発展していく基礎が築かれた。

中国の影響を受けた三川内焼

肥前一带で始まった磁器は、おもに中国磁器を模倣することで発達してきた。また、17世紀中ごろの有田窯では中国の磁器生産技術が導入され、吹墨装飾や口鏤、色絵、墨弾きなどの新しい装飾手法もとり入れられる。これは、当時の日本でもな磁器の需要層であった支配階級や富裕な人びとが、中国磁器がもっとも優れた焼物であるという認識をもっていたからである。有田窯と同様に三川内焼も、そうした中国磁器の影響を大いにうけていたと考えられる。

2. 三川内焼の発展と独自性の確立(17世紀後半)

禁裏(朝廷)や将軍家に献上される

17世紀後半になると、三川内焼は先進地の有田に匹敵する高級磁器を生産できるまでに発達する。将軍家への献上品や禁裏御用の製品を焼成する高度な技術を確立した。

大橋康二氏によると、『徳川実紀』に1659年(万治2年9月1日)に平戸藩主松浦肥前守鎮信が「染付皿三百、鉢十」を献上したと記されており、1656年(明暦2)の大火によって焼失した江戸城が3年後(万治元)に再建され、将軍が江戸城本丸に移転するときに三川内焼が献上されたと考えられている。また、1699年(元禄12)には、藩主から禁裏御献上品の製作を命じられ、完成品を今村弥次兵衛正名(三之丞の子)が江戸の上屋敷まで持ちのぼったとされる。それ以降、禁裏御献上用の注文をしばしば

受けるようになったようである。このことから、当時の三川内焼は、将軍家や禁裏へ献上できるほどの品質の高い磁器を焼成していたことが推測される。

天草陶石の発見による大革新

このような三川内焼の発達の背景として、ふたつの大きな要因があげられる。ひとつは、優良な原料の発見である。『三川内窯業沿革史』では、1662年(寛文2)今村弥次兵衛正名が天草陶石を発見し、磁器の大革新をもたらしたとしている。天草陶石の使用

開始年代には諸説あり、まだ定かではないが、この天草陶石と1633年に発見されたという地元の三ツ岳陶石を混ぜることによって、三川内焼独特の素地ができたと考えられているが、長崎県窯業技術センターの最新の研究によると、白くなめらかな磁肌をもち繊細な細工を得意とする三川内焼は、不純物の含有量が少なく耐火度が高い天草陶石の性質によるところが大きいという。この天草陶石のおかげで、元禄年間(1688~1704)以降、三川内焼は他の磁器生産地とは異なる独特の作風を確立していくことになった。それは、美しい独特の艶をもつ白磁、精巧で緻密な細工、薄手のつくりといった特徴に代表される。

生産体制の確立と海外輸出

ふたつ目は、高級磁器の生産体制の整備である。1668年(寛文8)、平戸藩は三川内山に御細工所、御代官役所、御番宅等合計5棟を新築し、代官が皿山一切の

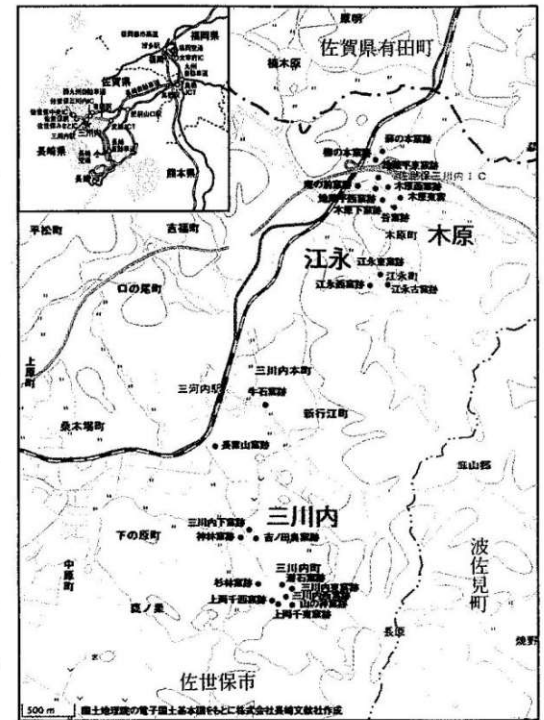




図1 染付菊文小皿 三川内焼 1655~1670年代
佐世保市教育委員会蔵

管理をおこなうことになった。平戸藩が、磁器産業に積極的にかかわり始めたのである。御用品を製作する御細工所には、棟梁の今村弥次兵衛正名をはじめ、20余名の選抜工人が勤め、各二人扶持と出勤扶持を与えられたという。このころから、一般の三川内焼の製作体制とは別に藩の御用窯^{ごようがま}という機能が設けられ、藩主の注文に応じて質の高い磁器が焼かれるようになったと考えられる。そのことを裏づけるかのように、三川内山の代官所跡と伝えられる場所からは、1655~70年代ごろにつくられた高級磁器が発掘調査によって発見されている(図1)。

いっぽうで、1650~80年代ごろには輸出品もつくられていた。主要な磁器輸出国であった中国において、明末清初の国内動乱^{せんかいれい}がおこり、遷海^{せんかい}令も実施された。そのため、中国磁器の入手が困難になったオランダ東インド会社や中国商人が日本の磁器を求めるようになり、有田や波佐見と同様に三川内山でもタイやインドネシアといった東南アジア向けの染付の碗や皿を量産することになったのである。

17世紀後半、三川内山では、輸出品から国内向けの日用食器、将軍家や禁裏のための高級磁器にいたるまで、さまざまなタイプの磁器を生産するなかで、技術が磨かれ三川内焼の個性が育っていった。

※遷海令：清朝が実施した海岸地域から内陸に移住を命じた政策

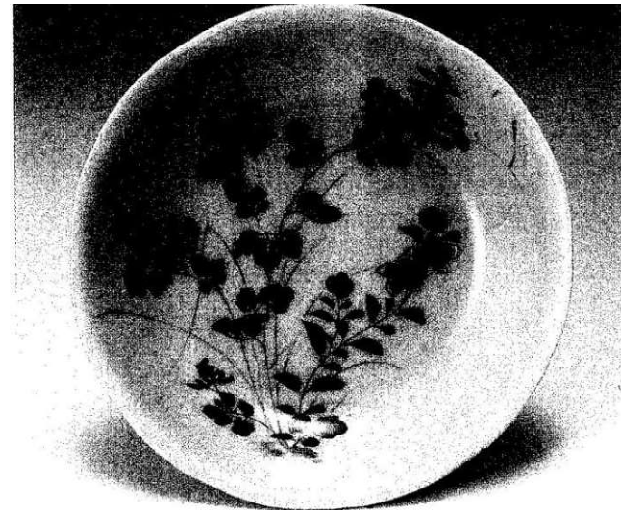


図2 染付秋草文輪花小皿 三川内焼 1723年(享保8)
佐賀県立九州陶磁文化館蔵

3. 洗練の時代(18世紀)

デザインの進化と華麗な文様

17世紀後半に、技術的な発展を遂げ独自性を確立した三川内焼は、18世紀になるとさらに洗練されたデザインの製品が作られるようになる。伝世しているそのころの三川内焼を概観すると、輸出品は見られず、国内で使用される食器としての蓋付碗や皿類が比較的多い。有田窯の製品では、高台内に「大明成化年製」や「福」など中国風の銘を入れる場合が多いが、三川内焼の碗や皿では高台内に二重の圏線が書かれることが多く、そのころの三川内焼の特徴のひとつとなっている。

18世紀前半には、皿の文様として瀟洒な草花^{しょうしゃ}が染付で描かれた作品がしばしば見られる(図2)。1714年(正徳4)平戸藩の御用絵師片山尚仙は藩主からの指示をうけて京都で草花の写生をおこない、そのスケッチが三川内山に送られる。1725年(享保10)には京都の草花スケッチ172枚からなる2冊の冊子が、やきものの絵手本として三川内山に送られる。このころの三川内焼に瀟洒な草花文が多いことは、このような動きと関連があると大橋康二氏は指摘している。

日本画壇最大の流派である狩野派の流れをくむ絵師が、文化的に洗練された京都の地で、三川内焼の文様のために写生をおこなっていたのである。京都から遠く離れた三川内の地で、禁裏や公家好みのデザイン^{くげ}のやきものが生みだされて

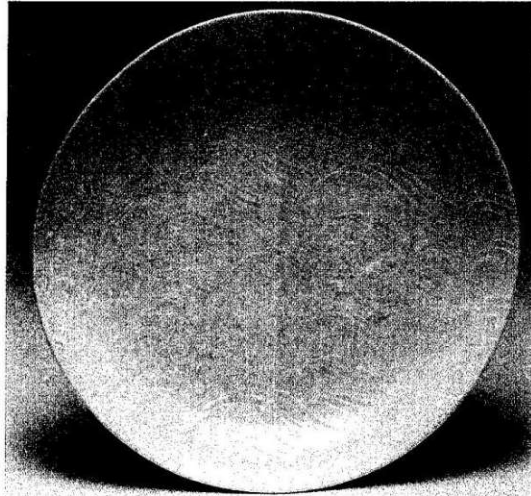


図3 染付陽刻鶴松竹文皿 三川内焼 18世紀後半
長崎県蔵 デイヴィッド・ハイアット・キング夫妻寄贈

いたことは注目に値する。

精巧を極めた宝暦年間

『陶器類集』では、宝暦年間(1751~64)の三川内焼について、「実ニ精巧ヲ極メ磁面ニ透彫或ハ薄肉浮刻等アリテ最モ細密ニシテ極テ奇品也(実に精巧を極め、磁器表面に透かし彫りまたは薄い浮彫りなどが施され、もっとも細密で極めて珍しい品である)」と記している。図3は、この表現によくあてはまる作品といえよう。内面の見込には波と亀が穏やかな抑揚の置上技法^{でいしょう}で表される。置上技法とは泥漿を筆で塗り重ね立体的に文様を表現する手法である。皿の外面には、しっかりとした染付の筆致で松竹梅が描かれ、置上と染付を併用して鶴が表現されている。端正な器形に、素地の美しさとレリーフ表現の精緻さ、格調高い染付文様が一体となった、この時代を代表する作品である。

1796年(寛政8)の天草上田家『近国焼物大概帳』には、三川内皿山について「南京焼之極上品焼物出来(磁器の極上品ができてい)」 「文鎮形打物其外之極上品焼物色々出来(文鎮や型で作る物など極上品がいろいろできてい)」と記されており、質の高い磁器や細工物の優品がつくられていたことがうかがえる。

このように、三川内焼は、18世紀を通して禁裏の注文や将軍家への献上品をは

じめとする洗練された磁器製作に努め、高い技術力を維持していた。

4. 三川内焼の黄金時代(19世紀)

外国人も感動した卵殻磁器

19世紀は、三川内焼にとって、伝統に培われた技術力をもとに新たな作風を展開する。それは国内外で高く評価され、躍進を遂げた時代であった。三川内焼の黄金時代ともいえる。

19世紀にまず注目されるのは、薄手磁器の開発である。三川内焼は、1830年(文政13)から長崎でオランダ向けに磁器輸出を開始した。当初は細工物の水入れ(水滴)を売り込んだようだが、オランダ人は薄手のコーヒー碗を好むことがわかり、薄手の器づくりに積極的に取り組む。従来から、三川内焼は原料の性質により薄手の磁器を得意としてきたが、1837年には、「紙のように薄い」とたとえられる極めて薄い磁器を池田安次郎が完成させる。その薄さは、蓋と身を合わせてわずか30グラムほどであったという。

この薄手磁器は、卵の殻のように薄いことから卵殻磁器^{らんかく}と呼ばれ、オランダ人に限らず広く欧米で好評を博すことになる。イギリスの有力新聞タイムズでは、1862年に開催されたロンドン万博の記事で、日本コーナーに出品された卵殻磁器を絶賛しており、オークション広告では、しばしば卵殻磁器が目玉商品として紹介されている。そのころの日本は、開国以来、多くの外国人が仕事や貿易、旅行のために訪れていた。その結果、数多くの旅行記が記されたのだが、そうした旅行記のなかでは、長崎に行ったら卵殻磁器を購入するよう勧められていたこと、卵殻磁器に接した時の感動、実際に購入し満足していることなどが著されている。三川内焼に代表される卵殻磁器が長崎の土産品であることを欧米の人びとが周知しており、さらにその品質の高さを誰もが認めている様子を知ることができる。こうして、卵殻磁器は三川内焼の輸出の主力商品に成長し、三川内山を活気づけた。その人気ぶりと品質の良さに目を付けた有田の商人久富与次兵衛や田代紋左衛門が、三川内焼の卵殻磁器を仕入れ、上絵付を施して有田焼として輸出した。

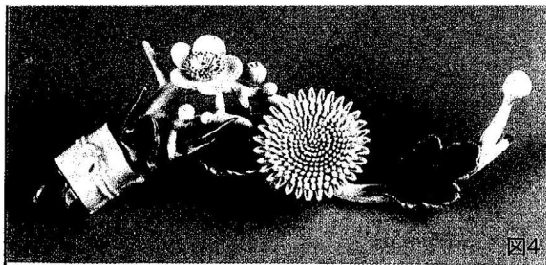


図4 瑠璃釉掛分梅菊形熨斗押 三川内焼
江戸後期 長崎歴史文化博物館蔵
図5 瑠璃釉掛分騎牛童子置物 三川内焼
江戸後期 長崎歴史文化博物館蔵
図6 瑠璃釉獅子形根付 三川内焼
江戸後期 長崎歴史文化博物館蔵



図5



図6

1883年(明治16)の三川内焼は、海外向け7、国内向け3の割合で生産されており、いかに輸出品の生産に力を入れていたかがわかる。

万国博覧会で魅了した三川内焼

三川内焼が得意としてきた細工の技術はさらに発達を見せる。19世紀前半には、国内向けの熨斗押(のしおさえ・贈答の際に添える熨斗をおさえる物)(図4)や文鎮、置物(図5)、根付(図6)などが多く見られるが、19世紀後半になると大型の作品が目立つてくる。龍や獅子などを象った彫像によって装飾された豪華な壺や瓶が数多くつくられた。1893年にアメリカで開催されたシカゴ万博では、透かし彫りの作品とともに、龍を巻き付けた壺が特に美しいと評価され入賞している。

透かし彫りは、19世紀後半に新しい作風を生み出した。それまでは、香炉の蓋などに見られる程度であったが、1884年(明治17)に口石丈之助が完成させた香炉は、高く積み重ねた胴や蓋、両側に飾られた鈴にも精巧な籠目状の透かし彫りが施されている。装飾性の高さから注目をあつめた作品であり、海外の日本陶磁コレク

ションのなかにも見ることができる。

19世紀に新しく開発された装飾技術を施した作品は、欧米で開催された博覧会に出品され、つぎのような成績を残している。

1878年(明治11)パリ万国博覧会 名誉賞：中里茂三郎・口石慶治

1893年(明治26)シカゴ・コロンブス万国博覧会 入賞：豊島政治

1900年(明治33)パリ万国博覧会 褒状：今村啓吉・豊島政治・里見政七

1904年(明治37)セントルイス万国博覧会

金賞：三河内陶磁器業組合 銀賞：三川内陶磁器合資会社 銅賞：江永陶磁器業組合・木原陶磁器業組合

1910年(明治43)日英博覧会 銀賞：豊島政治

銅賞：田中宇太郎・江永陶業組合・木原陶業組合

このように、19世紀の三川内焼は輸出に活路を見出し、新たな作風を展開し、国内外で高い評価を得ていた。

第2章 魅力

1. 端正な染付

中国から輸入された藍色の呉須

江戸時代、平戸藩は三川内焼を將軍家への例年献上に用いていた。例年献上とは、各地の大名に將軍への忠誠心の証として義務づけられた、定期的な贈呈制度のことである。各大名は、特産品や輸入品などを献上していたが、特産の磁器を例年献上したのは、佐賀藩と平戸藩だけであった。そのためか、三川内焼の高級品に見える染付は、作行きが丁寧で美しさと品格をそなえているものが多い。

染付の原料となる呉須は、日本ではほとんど産出されないため、中国から輸入されていた。『長崎の唐人貿易』によると、呉須は享保年間に一時輸入禁止になったことがあるが、佐賀藩と平戸藩は、磁器は將軍への献上に必要なだと主張し、佐賀藩は年々千斤、平戸藩は五百斤を永代保証されたという。このように特別な配慮のもと、恐らく良質の呉須を、丁寧に精製して使っていたのであろう。三川内焼の染付

※参考文献参照



図13 染付錆釉花文冠形香炉 三川内焼
江戸中期 長崎歴史文化博物館蔵



図14 白磁透彫菊葵文紋章入香炉 三川内焼
19世紀前半 長崎歴史文化博物館蔵

にはヨーロッパ各地へ広まった産業革命によって、生活に余裕が生まれ豊かな暮らしを送るようになった人々が、ティータイムにこのような器を使っていたのかもしれない。薄手磁器に描かれている文様は、中国や日本の人物、山水風景、花鳥など東洋的であるが、器の形や明るい色調、赤と金を用いた派手な装飾は、当時の欧米の人々の好みを反映していると思われる。

3.透かし彫り

美しい籠目や網目の技術

透かし彫りは、三川内山では遅くとも元禄年間(1688~1704)ごろには作られていた。平戸藩松浦家の上屋敷があった向柳原町遺跡(東京都台東区)では、元禄ごろを下限とする層から籠の花生を模して透かし彫りで作られた三川内焼の精巧な掛花生の破片が出土している。また、細い籠目状の透かし彫り(図13)や、網目状の透かし彫り(図14)など、現存する作品も少なくない。

なかでも、透かし彫りの真骨頂は、19世紀後半につくられた香炉であろう。籠目状の香炉を2段あるいは3段も重ね、それぞれの両脇に透かし彫りの鈴を下げるという大変凝ったスタイルが考案された。その創始者は、口石丈之助である。開発に3年の歳月を費やし、1884年(明治17)に完成させたという。1890年(明治23)、上野で開催された第3回内国勸業博覧会に出品された彼の作品は、外国人に買いあげられ、以後、外国人向けに注文生産をおこなうようになる。また同年には、かねてより出願



図15 白磁瓜栗鼠形香炉 三川内焼
江戸後期 長崎歴史文化博物館蔵



図16 錆瑠璃釉掛竹竹林人物形筆筒
三川内焼 江戸後期
長崎歴史文化博物館蔵

していた皇室への献納が認められ、長崎県知事を通して透かし彫り香炉が納められた。1900年(明治33)には、今村克次郎が製作した白磁の2段香炉が、皇太子殿下御結婚大典の奉祝献納品として佐世保市から納められた。この種の透かし彫り香炉は、三川内焼のなかでもとくに装飾的な作品であり、今なお作りつづげられている。

4.細工物

豊かな表現を伝える工夫

三川内焼は、天草陶石を使用することで、こまやかな立体表現の細工物を得意としてきた。細工物は、ロクロを使用せず型や細工用の道具を用い作られる。19世紀前半までは、香炉や熨斗押・文鎮、筆筒、根付といった小型で日本的な作品が多い。瓜に乗った栗鼠形の白磁香炉は(図15)、三川内焼の白い素地の美しさを活かし彩色は施されていないが、生き生きとした栗鼠の表現が巧みである。梅と菊の折り枝を束ねた形状の熨斗押(図4)は、瑠璃釉が掛け分けられ、梅花の雄蕊には錆釉がわずかに施され彩りを添えている。梅花の花弁の薄さや菊花の繊細な細工が素晴らしい。図16は、竹林の七賢をイメージしたものであろうか、林立する竹を背景

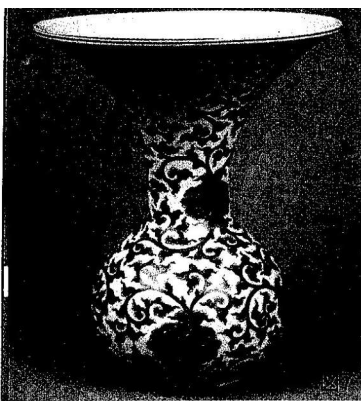


図7 染付唐草文広口瓶 三川内焼
江戸後期 長崎歴史文化博物館蔵

図8 染付四芸図水指 三川内焼
1853年(嘉永6) 長崎歴史文化博物館蔵

図9 染付唐子文碗 三川内焼
1838年(天保9) 長崎歴史文化博物館蔵

は、焼成の状態により黒味を帯びることもあるが、艶やかな白磁の上で明るく美しい藍色に発色し、端正な雰囲気を感じている。その描き方を見ると、繊細で安定感のある輪郭線が描かれ、その線をはみ出すことなく丁寧に濃みが施されている。濃みとは、濃み筆を用いて文様を塗りつぶすことであり、熟練した筆遣いによって、巧みに濃淡が表現される。三川内焼はこの濃みに優れており、藍色のグラデーションによる表現は、不自然なムラが少なく、立体感や細部の描写が巧みである。

染付で表現される文様は、日本的な草花文も多いが、唐草文(図7)や賢人(図8)、唐子、山水図など中国の磁器や絵画の影響も色濃く見られる。19世紀はじめごろに定型化した松と牡丹に唐子を組み合わせさせたデザインは(図9)、三川内焼の文様として有名であり、今日も食器をはじめとする様々な製品の文様に用いられている。

2. 薄手磁器(卵殻磁器)

職人技で成し遂げた薄さと丈夫さ

三川内焼の薄手磁器は、器壁が薄いため多くの光を透して白さが際立つ。また、

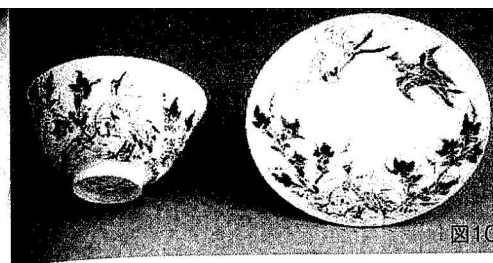


図10



図11



図12

図10 色絵鶴草花文碗皿
三川内焼(薄手磁器)
19世紀
長崎歴史文化博物館蔵

図11 白磁蓋碗
三川内焼(薄手磁器)
19世紀
長崎歴史文化博物館蔵

図12 染付竹林七賢図碗皿
三川内焼(薄手磁器)
19世紀後半
長崎歴史文化博物館蔵

その上に描かれる明るい色調の文様が白い素地と調和して美しい。これは、三川内焼の原料の性質によるところが大きいですが、製作にも高度な技術を必要とした。

三川内における薄手磁器の製作は、ロクロで器の形を作った後、ロウソクの光を透かして厚みを確認しながら薄く削って成形していたという。薄すぎたり厚さにムラがあると焼成中に変形してしまうので、そのぎりぎりの薄さを見極めて削ることが非常に難しかったようである。また、薄いけれど思ったほど脆くなく、丈夫であることに19世紀のヨーロッパ人は大変驚いた。このような強度を持たせるためには、焼成中に磁器としての結晶化を進める高温と適切な時間の維持が必要である。製作にあたっては、薪を燃料とする登り窯で各焼成室内部の温度を適切に管理し焼きあげる窯焚き職人も、重要な責任を担っていた。艶やかな美しい輝きを放つ薄手磁器を見ると、熟練した職人たちの高度な技を実感できるのではないだろうか。

海外向けの輸出と欧米での流行

薄手磁器の器種は、受皿付の碗(図10)や、蓋付の碗(図11)、深めのチョコレートカップ(図12)が特に多く、その多くは輸出用に作られていた。イギリスに始まり19世紀

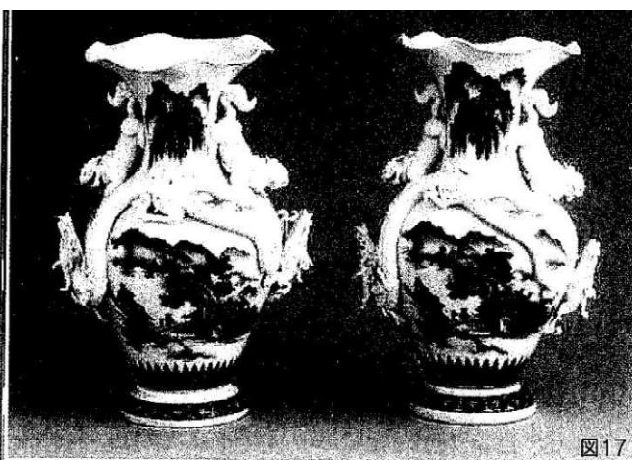


図17

図17 染付山水文獅子耳龍貼広口瓶 三川内焼
明治時代 長崎歴史文化博物館蔵



図18

図18 染付雲鶴虎文龍巻瓢形瓶 三川内焼
19世紀 長崎歴史文化博物館蔵

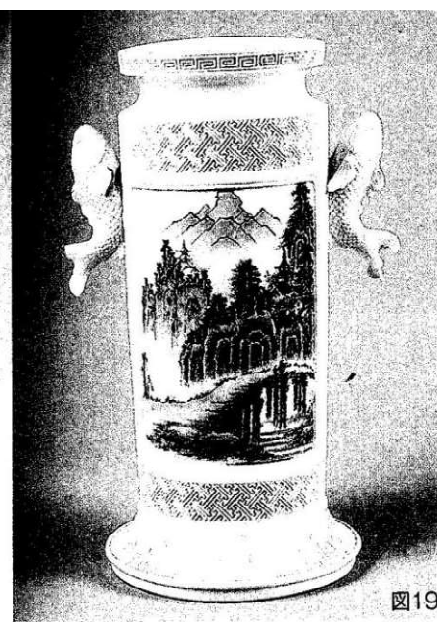


図19

図19 染付山水文鯉耳花瓶 三川内焼
19世紀 長崎歴史文化博物館蔵



に3人の中国人が表され、ひとりには書物を開いている。竹の部分が筒状になった筆筒で、銹釉・瑠璃釉・透明釉が掛け分けられ、人物の顔は無釉である。髪や眉・髭、目尻のシワなど細部の表現にまで凝っている。この時期の細工物は、色絵をつかわず、銹釉(茶色)・瑠璃釉(紺色)・青磁釉(水色)といった釉薬を用いて彩りとしている。色絵に比べ、落ち着いて渋い雰囲気仕上がっており、日本人の好みになかった作風である。

ジャポニスムのブーム

いっぽう、19世紀後半になると雰囲気がからりと変わり、欧米人好みの大型で装飾的な作品が多くなる。例えば図17は、口縁部を波打たせた広口瓶に山水風景が染付で描かれ、頸部に一對の獅子、その下に一對の龍の彫刻が添えられた装飾的な花瓶である。図18は、伝統的な瓢形の瓶に鶴と虎が描かれ、一對の細工物の龍が瓶のくびれた部分を取り巻いている。龍は胴の鱗が一枚一枚丁寧にあらわされ、厳しい表情が迫力を生んでいる。このような東洋的なテイストを主張しながらも、立体的な装飾が目立つ作品は、19世紀後半以降ヨーロッパで広く流行したジャポニスムを背景に、室内装飾品として人気があり盛んに製作されたようである。

5. 陰刻

白の美を表現する彫り

19世紀には、器表面の地の部分に幾何学文様を陰刻するデザインが多用された(図19)。中国雍正年間(1722~35年)ごろにつくられた景德鎮磁器の影響を受け考案されたものと思われるが、その連続する文様パターンけいとくちんの正確さと緻密さ、彫りの深さは見事であり、現在では再現が難しいほどの高度な技術である。細部まで神経が行き届いた緊張感が、器の表面にみなぎっている。この彫刻のシャープさが損なわれないよう、陰刻部分には釉薬がほとんどかけられていない。

この緻密な陰刻による文様表現は、純白でキメの細かい素地との相乗効果により、一段と際立った美しさをたたえている。

6. 色絵

19世紀に盛んだった赤絵

三川内焼の色絵は、17世紀後半に少しおこなわれていたが、本格的になるのは19世紀に入ってからである。

弘化嘉永年間(1844~54)は、三川内皿山が活況を呈していたころで、さまざまな



図20



図21

図20 色絵桐鳳凰文龍耳広口瓶 三川内焼
19世紀 長崎歴史文化博物館蔵
図21 色絵六歌仙文受皿付蓋碗 三川内焼(薄手磁器)
明治時代 長崎歴史文化博物館

製品が盛んにつくられていた。そのなかで、赤絵屋は6軒あったという。そのころはまだ、金彩は使われていなかったようで、図20のような金彩を用いない色絵装飾がおこなわれていた。この花瓶は、三川内焼の色絵磁器の名品であり、純白の磁肌に翼を広げた鳳凰と草花・流水の文様が美しい。絵付は丁寧で、配色のバランスも良く、格調高い作風である。

赤絵と金彩の融合

いっぽう、1865年(慶応元)には、いわゆる上絵の二度付けがはじまり、極彩色の華やかな作品が生まれた。上絵の二度付けとは、上絵具と金彩は融ける温度が異なるので、2度に分けて焼き付けるという手法である。三川内焼では19世紀から盛んにつくられた輸出品や万国博覧会の出品作品に見られる。この方法は、有田ではすでに17世紀後半以降の金銀彩や金欄手きんらんての製作で見られるものだが、図21のような細密な赤い線と金で表現する手法は、三川内が得意とした。この二度付けによる金赤彩の細密画の代表的な職人として、森利喜松があげられる。彼が描いた作品は、1873年(明治6)のウィーン万国博覧会や、1876年(明治9)のフィラデルフィア万国博覧会等で高評を博した。とくに金赤彩の細密な六歌仙文様は、1873年と1876年の万国博覧会で注目を集めた。同様の絵付けを施した薄手の受け皿付き蓋碗が、長崎歴史文化博物館に所蔵されている(図21)。

三川内焼をふりかえって

もし、三川内焼の特徴は何ですか、と問われたら、皆さんはなんと答えるだろうか。一言で簡単に説明できないのではないだろうか。それがまさに三川内焼の特徴といえるかもしれない。

三川内焼は、食器類だけでなく、調度品や置物、根付、文鎮など幅広い種類の焼き物を生み出してきた。装飾技術も、染付や透かし彫り、細工、彫刻、陰刻など多彩であり、どの技術も完成度が高い。技術的多様性と突き詰められた高度な技術力に裏打ちされて、様々な珠玉のような名品が生み出されてきたのである。

だから、染付や透かし彫りや細工など、どれをとっても他窯の製品とは異なる三川内焼らしさを感じられるのではないだろうか。

そして、三川内焼の器形やデザインには、凛とした品格を感じることもある。三川内焼を保護奨励してきた平戸藩は、鎮信流の茶道を創始した4代藩主松浦鎮信や、学芸大名と呼ばれた9代藩主静山などの歴代藩主によって文化の香り高い風潮が形成された。そういった背景も、平戸藩の産業の一つであった三川内焼に影響をおよぼしたのかもしれない。

現在の三川内山では、このような伝統を継承し、新しい時代にあった三川内焼らしい高品質なやきもの作りの努力が続けられている。今後の三川内焼のさらなる飛躍を期待したい。

<参考文献>

- 高木如水『陶器類集』青木高山堂 1900年
- 高橋久満治『三川内窯業沿革史』 1911年
- 中島浩気『肥前陶磁史考』肥前陶磁史考刊行会 1936年
- 山脇徳二郎『長崎の唐人貿易』吉川弘文館 1964年
- 武内浩一・小林孝幸・都筑宏『県内原料による古陶磁調製品の開発(1)佐世保市針尾島の網代陶石』『長崎県窯業技術センター研究報告(平成11年度)』長崎県窯業技術センター 2000年
- 宮崎博・渋谷葉子・飯塚武司『台東区向柳原町遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告書第169集 東京都埋蔵文化財センター 2005年
- 『將軍家献上の鍋島・平戸・唐津-精巧なるやきもの-』展覧会図録 佐賀県立九州陶磁文化館 2012年

長崎の陶磁器

長崎文献社 発行 三川内焼